

中村 伊知哉さん (60)

From Tokyo



大義を問う

TOKYO2020+1

無観客こそそのレガシーを

東京五輪・パラリンピックは賛否が分かれてしまっているが、無観客でも開催することになって僕はよかったと思う。1961年生まれで、64年の前回の東京五輪が人生で最初の記憶。あの東京五輪は敗戦からの



なかむら・いちや 京都市出身。京都大卒。ロックバンド「少年ナイフ」ディレクターを経て旧郵政省へ。スタンフォード日本センター研究所長や慶応大教授を歴任し2020年4月から現職。16年に政府のオリ・パラ推進本部で参与を務めた。超人スポーツ協会共同代表。

復興であり、焼け野原を開発し、経済成長の途上にある日本を見せるのが意義だった。半世紀たつて成熟した国として開く五輪は、高齢化社会を他国より先に迎える中で、サステイナブル(持続可能な面)を見せる。それがレガシーとなるはずだったが、新型コロナウイルスで変わった。商業化した五輪という側面が、無観客になって、アスリート中心の、純粋なスポーツの大会に引き戻されることになった。コロナに(肥大化は)あかんと言われて、純粋な元の五輪に戻るみたいな感じ。今後の五輪はこういうものと世界に示せる。前の東京大会は戦争しても復興して、もう一回ちゃんと生きていける姿を示す意義もあった。今回は第2次世界大戦よりもさらに広い範囲でコロナに苦しんでいるところから復興する、ということを示すチャンス。安倍(晋三)さんや菅(義偉)

さんと同じ言葉を使いたくないが、人類の危機を乗り越える象徴になる。日本だからこそできると思う。日本は大国から見ると、なんとなく(政情や治安が)安定している。世界のどの国とも仲良く相手できる。僕は『デジタル屋』なのでデジタルのレガシーを望んでいる。前の東京五輪では初のテレビ世界中継が行われた。今回はAIとデータ。コロナの前は、訪日外国人に人工知能を使った自動翻訳や顔認証システムでのおもてなしを考えていたけど、デジタルの力を使って競技場でみんなが(バーチャルで)応援したり、陸上選手の走りをデータで残して自分の目の前でその走りを再現できるようにになったりしないか。レガシーを変える、ことを考えたらおもしろい。(談)

聞き手・国貞仁志
随時掲載します

2021.7.14

京都新聞 朝刊

5面